特集
〈事例〉

高校新聞部の生徒に広報誌の記事作成を依頼

公益社団法人
宮崎県シルバー人材センター連合会
（宮崎県）

宮崎県ＳＣ連合会は、シルバー人材センター事業を周知するためのツールとして、連合会広報誌「シルバーみやざき」を発行している。令和２年度の制作から、県内の高校新聞部の生徒に取材と記事の作成を依頼した。読者である会員などにとって、孫世代が書く記事は「新鮮だ」と好評で、高校の先生からは「良い機会を与えてもらった」と、双方にとって意義のある取り組みとなっている。

宮崎県ＳＣ連合会（以下、連合会）は、令和四年十月一日現在、県内二十一のシルバー人材センター（連合会未加入を除く）の事業活動を支援し、多様な取り組みを展開している。令和三年度の事業実績は、契約金額が約二十七億八千三百七十五万三千円（労働者派遣事業を含む）、会員数は五千二百五十五人であった。

パターン化していた誌面に新風を吹き込む

シルバー人材センターへの入会促進や、センター事業の意義などを周知するためのツールとして、連合会広報誌「シルバーみやざき」（Ａ４判）を年一回、一月前後に発行している。発行部数は一万二千部。各地域のセンターのほか、各自治体や関係機関・団体などに配布している。

さらに、第三十二号からは表紙に大きめの文字で「ご自由にお持ち帰りください」と記載し、公共施設や道の駅などに配架して、多くの県民の目に触れるように周知活動に努めている。

興味を持って手に取ってもらえるよう、制作に当たってはビジュアルを重視し、全てのページをカラーにして写真を多用したり、読みやすいレイアウトにしたりしながら、連合会の取り組みや各地域のセンター活動を紹介するなど記事の企画にも趣向を凝らしてきた。

高校新聞部との連携第一弾となった、連合会広報誌「シルバーみやざき」第三十二号を手にする、大田原節郎常務理事兼事務局長

しかし、工夫を重ねても何となくパターン化してしまうため、これまでになかった新たなアイデアを模索していた。

そこで、高校生に記事を書いてもらおうという発想が芽生えた。

提案をした連合会の大田原節郎常務理事兼事務局長は、令和二年の夏ごろに「若い人の視点を誌面に取り入れてはどうだろうかと、ひらめいたのが最初でした」と振り返る。

広報誌の編集会議で提案した具体的な内容は、県内の高校の新聞部で活動する生徒に協力してもらい、会員を取材して記事としてまとめてもらうというもの。編集会議で賛同を得て、取り組むことになった。

高校新聞部が作成に携わった「シルバーみやざき」第32・33号。表紙に「ご自由にお持ち帰りください」と記載し、公共施設や道の駅などに配架している

高校の新聞部にアプローチ 記事内容は一任

宮崎県内には、県立高校が三十六校ある。このうち、三校で新聞部が活動していることが分かったため、連合会の近くに所在する県立宮崎大宮高等学校にアプローチした。

それまで同校とは交流がなかったため応じてもらえるのか、大田原事務局長は多少の不安を抱きつつも、高校に連絡。新聞部顧問の先生を紹介してもらって、シルバー人材センターの就業や活動現場を取材し、会員にインタビューをして、高校生の目線から連合会広報誌の記事を作成してもらえないかと依頼した。

「顧問の先生は、学校とは異なる団体の広報誌の作成に携わるのは、新聞部にとっても良い経験になると受け止めたようです。コロナ禍で新聞部の取材機会が減っていたこともあり、ぜひ、生徒たちに体験させたいと快諾してくれました」と、大田原事務局長。

早速、同校に連合会会長名で依頼書を作成して送付。以降は、基本的に顧問の先生とのやりとりで、取材に関する連絡から記事の作成、仕上げまで実現した。

取材のセッティングは、連合会で行った。高校の授業がない土・日曜日に、会員がインタビューに応じてくれる現場を選んだ。作成してもらう記事は、表紙をめくってすぐの見開き二ページに決定。記事のまとめ方やレイアウトは、新聞部に一任した。

県内三高校の新聞部が記事を作成

これまでに新聞部のある三校全ての高校から、部活動の一環として賛同を得ており、「シルバーみやざき」第三十二号から記事を掲載している。

発行済みの第三十一・三十三号は、連合会のホームページ上で閲覧することができる。

●第三十二号（令和三年二月発行）

最初に記事を作成したのは、県立宮崎大宮高等学校新聞部。

令和二年十月、新富町ＳＣの会員が取り組むボランティア活動を取材した内容で、「縁の下の力持ちシルバー人材センター」「高校生から見た雰囲気」のタイトルが付けられた。新富町富田浜で草刈りやごみ拾いに精を出す三人の会員に、センターに入会したきっかけや魅力についてインタビューを行い、取材した新聞部員一人一人の編集後記で構成。ボランティア活動の様子と会員、新聞部員の写真も添えている。

記事の中で高校生の視点から見たシルバー人材センターについて、「会員の皆さんは、健康な体と健全な心で生き生きと働いていらっしゃいました。市民のために、綺麗（きれい）になっていくことを純粋に喜びを感じながら作業してくださっている方たちがいることを、たくさ

んの方に知って欲しいです」（原文ママ）と感想を記している。

大田原事務局長は「高校生は、最初は緊張しているように見えましたが、次第に生き生きとした表情で取材をしていました。インタビューを受けた会員がにこやかな表情で応じていて、和やかな雰囲気だったことも印象に残っています」と、取材時の様子を振り返る。

●第三十三号（令和四年二月発行）

翌年は、県立都城泉ヶ丘高等学校新聞部が記事を作成。

令和三年十一月、島津家の本宅や庭園、貴重な史料を展示する都城島津邸で就業する都城市SCの会員を取材した。

記事は、「活力あふれる　シルバー人材センター」「都城島津邸での取材を通して感じた元気の秘密」のタイトルが付けられ、都城島津邸で館内や庭園の清掃作業に就いている会員三人のインタビュー記事と写真、新聞部の紹介記事と部員の写真で構成。会員へのインタビューは、入会したときの思いや仕事のやりがい、抱負などを尋ねている。

記事の中では、「あいさつなどを通して人とのかかわりを持つことが、若々しさを保つ秘訣（ひけつ）」「お客様のことを第一に考え、自分の仕事と向き合うことで人生をより楽しむことができる」「元気いっぱいでいられる秘訣は、お仕事と趣味を楽しむ時間とのメリハリをつけることにある」（原文ママ）と、会員の元気の秘密について、高校生の視点から独自の分析を行っている。

宮崎大宮高校新聞
緑の下の力持ち シルバー人材センター
高校生から見た奉仕丸

県立宮崎大宮高等学校新聞部では、草刈りやごみ拾いの現場で新富町SCの会員にインタビューを行った（写真上）。この取材記事は「シルバーみやざき」第三十二号に掲載された（写真左）

●第三十四号

現在制作中（令和四年十二月下旬発行予定）で、県立宮崎南高等学校新聞部が記事を作成している。

高校生たちにとって意義のある経験に

これまでに発行された新聞部の記事について、大田原事務局長は「新鮮に感じました。記事を書くためにセンターを知って、会員と向き合い、写真撮影もして、高校生が自分たちでまとめたもので、シルバー人材センターに対する素直な表現で感想を交えて書いてくれたことがうれしかったです。依頼を快く引き受けてくれたことに大変感謝しています」とにこやかに語る。

センターの関係者からも「面白い」「新鮮な気持ちになる」「いい広報誌ができた」と、孫の世代が書く記事は好評である。

令和四年五月二十四日付の宮崎日日新聞では、「高校新聞部がシルバー人材センター広報誌で活躍」との見出しで、大田原事務局長のコメントと、高校と連携した新たな取り組みが紹介された。

新聞部の顧問の先生からは、連合会の協力依頼に対して「良い機会を与えてもらいました」との感想が寄せられた。

「高校生にとっては、祖父母と同じくらいの年齢の高齢者と、その日に会ったばかりで取材という形で話をするのは初めてだったでしょう。こうした経験を通して、シルバー人材センターについて理解してもらえたと思います。また、高齢者が生きがいを感じて働いている姿を見て、その人の人生の一端に触れ、こういう働き方や仕事もあるという社会の一つの側面を知ったことで、何か感じるところがあったのではないでしょうか」と、大田原事務局長は感慨深げに話した。

「シルバーみやざき」第三十三号（写真右）掲載のため、県立都城泉ヶ丘高等学校新聞部では、都城島津製作所で清掃作業をする都城市SCの会員に元気の秘密をインタビューした（写真上）

「連合会にとって、これまでとはひと味違う、インパクトのある広報誌を発行することができています。インタビューを受けた会員にとっても、良い機会になったと思います。高校生からの質問に温かい表情で対応し、しっかりと答えていこうという姿勢も見えました」と、今回の取り組みから得たものを挙げた。

別の関係機関・団体との連携も積極的に進めたい

新聞部のある三校との取り組みが実現できたことから、連合会では今後も高校生とシルバー人材センターとの交流機会をつくっていきたいと考えており、どういう形でどのようなことができるのかを検討している。

「会員と高校生が接点を持ち、互いに元気になるような企画を考えていきたいです。自分たちだけの考えでは限界がありますので、外部の力や知恵を拝借し、一緒に考えて、あまり経費をかけずに互いに得るものがある取り組みを見いだしていきたい。知恵を出し合うことが大事だと思います」と大田原事務局長。

現在、センター事業の周知と会員拡大が課題となっており、特に労働者派遣事業や多様な仕事を受注していることを幅広くPRして、就業機会の拡大に結び付けたいと考えている。これまでも事業の周知に努めてきたが、なかなか浸透しないという。

大田原事務局長は「今回の高校との連携は、連合会にとっても貴重な経験になっています。これまで関係機関・団体と連携することはありましたが、今後は別の機関や団体との連携も積極的に進めていき、活動に取り組んでいくことで、センター事業をまず知ってもらうことから努めていきたい」と力を込めて語った。

（増山美智子）